ISSN 2188-0638

The Fulbrighter in Nagoya

No.32

February 2023

Nagoya Fulbright Association

The Fulbrighter in Nagoya No.32

目　　次

1. 巻頭言　　塚田守

2.　講演

「私の留学経験と医用工学 」

鈴鹿医療科学大学医用工学部　学部長・教授
伊原正先生

3.　名古屋フルブライト・アソシエーション会員の声を紡ぐ

オーラル・ヒストリーの取り組み

第 1 回「今辻三郎先生」(山本恵里子先生編集)

4.　会務報告

総会

会則

役員名簿

1. 巻頭言

2020年3月頃から2023年の現在までコロナ禍がまだつづいていますが、マスクを外すことを許容する方向に変化しています。また、コロナは2023年5月には、緊急感染症の2分類から一般的な5分類になるという動きがあり、2年以上続いたコロナ禍もやっと終焉に向かっていると感じられる今日この頃です。とはいえ、2021～2022年度の総会および講演会もオンラインになってしまいました。

総会および講演会への参加者は、昨年同様に、12名でした。今回講演していただいた伊原正先生は、総会の毎回出席してくださっている会員です。ご専門が医用工学と臨床工学と専門性が高く、講演会には適しないのではないかと先生ご自身も言われておりましたが、今回、講演をお引きうけくださり、専門分野をまったく知らない私たち会員に簡潔にわかりやすい言葉でお話くださいました。個人的には、伊原先生のご経歴の素晴らしさに感服いたしました。また、社会学のような学問を研究している私などとは異なり、社会的貢献の大きい分野の研究していることに敬意の念を抱きました。

前回の総会で承認されていました、「名古屋フルブライト・アソシエーション会員の声を紡ぐ：オーラル・ヒストリーの取り組み」の第1回目として、山本恵里子先生による、会員である今辻三郎先生の聞き取りが今回掲載されています。今辻先生のライフ・ストーリーの詳細は本文を読んでいただければお分かりかと思いますが、終戦を機に価値観が大きく変わった日本社会の変化が読み取れる極めて歴史的価値のある証言であると拝読しました。山本先生は、今後も毎年、会員の皆さんのオーラル・ヒストリーの取り組みを展開してくださるそうですので、会員の皆様、今後ともご協力をお願い申し上げます。

名古屋フルブライト・アソシエーション
会長兼事務局長　　塚田　守

2. 講演

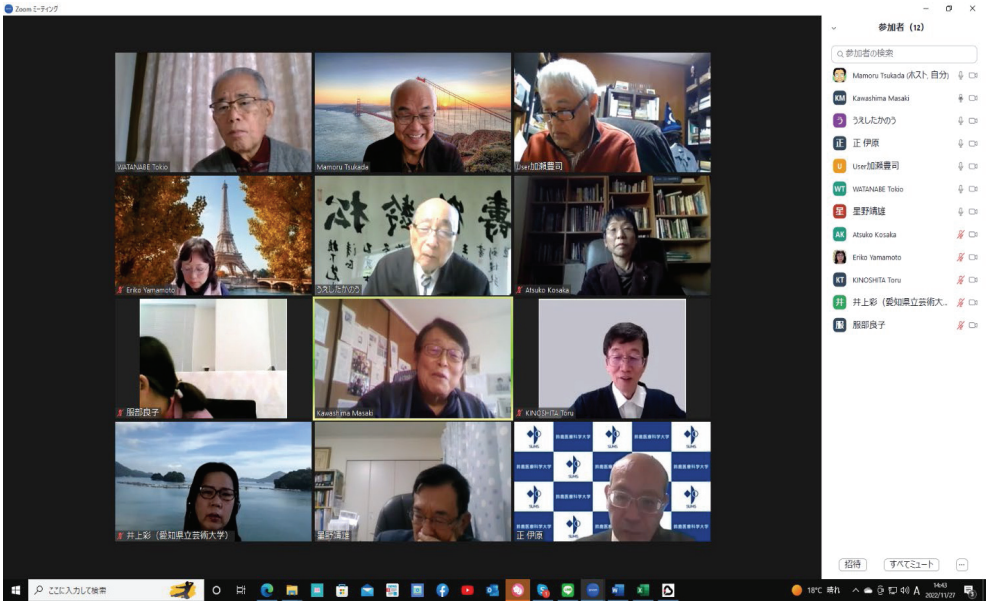
講演会　名古屋フルブライト・アソシエーション主催　2022年11月27日（日曜日）

（於　椙山女学園大学・オンライン講演会）

テーマ：私の留学経験と医用工学

鈴鹿医療科学大学医用工学部　学部長・教授

伊原正先生



（講演会のスクリーンショット）

伊原先生の講演の後、さまざまな質問があり活発な議論が行われました。

「私の留学経験と医用工学」

鹿医療科学大学医用工学部臨床工学科
伊原　正

今回、名古屋フルブライト・アソシエーションの会合でこのような機会を頂いたことを大変光栄に思っております。始めに私の履歴、職歴を紹介してフルブライトプログラムによる留学のきっかけについて述べます。私は、1980年に東京大学医学部保健学科を卒業し、1982年に東京大学大学院医学系研究科保健学専門課程修了後、東京大学大学院医学系研究科博士後期課程に進学しました。大学院在学中、1985年にフルブライトプログラム、数理科学振興財団の援助を頂いてNorth Carolina 州 Duke 大学大学院医用生体工学部(博士課程）に進学しました。1990年に博士課程を修了し、Ph.D. in Biomedical Engineering の学位を頂きました。その後 Duke 大学の先生の紹介で、1990年から1993年まで、米国マサチューセッツ州ハーバード大学研究員（Postdoctoral Fellow）を務めました。帰国後、1993年に鈴鹿医療科学技術大学医用工学部医用電子工学科助教授に就任し、現在は医用工学部臨床工学科教授・医用工学部長を務めております。

職歴

1989	米国ノースカロライナ州デューク大学教育助手　（Teaching Assistant）（平成２年８月まで）
1990	米国マサチューセッツ州ハーバード大学研究員　（Postdoctoral Fellow ）（平成５年9月まで）
1993	鈴鹿医療科学技術大学医用工学部医用電子工学科助教授　（平成７年１０月まで）
1995	鈴鹿医療科学技術大学医用工学部医用電子工学科教授　（平成１０年３月まで）
1996	鈴鹿医療科学技術大学大学院医療画像情報学研究科教授　（マル合）（平成１０年３月まで）
1998	鈴鹿医療科学大学大学院医療画像情報学研究科教授　（大学名変更）（平成１１年３月まで）
1998	鈴鹿医療科学大学医用工学部医用電子工学科教授　（大学名変更）
1999	鈴鹿医療科学大学大学院保健衛生学研究科教授　（研究科名変更）
2001	鈴鹿医療科学大学医用工学部臨床工学科学科長　（学科名称変更）（現在に至る）
2016	鈴鹿医療科学大学医用工学部学部長

次に、Duke 大学の歴史を簡単に紹介させて頂きます。Duke 大学の最初の母体は、1838年に North Carolina 州 Randolph County に作られた Union Institute of Academy です。1859年に Methodist 教会の支援で Trinity College を開設、1892年に煙草で財をなした Washington Duke が Trinity College を Durham に移転しました。1924年に正式に Duke 大学と名称変更し、その後漸次発展を遂げて、現在では学部生約6800名、大学院生約10,000名を擁する総合大学になっております。私が専門とした Biomedical Engineering は、医療・へ

ルスケアに対する工学原理・技術の応用分野で、医療機器、生体力学、生体材料、生体情報、臨床工学、リハビリテーション工学など多岐にわたります。医療機器にも診断機器、モニタ機器、画像診断装置、植込機器、医療用センサなど様々な応用分野があります。

Duke大学

1838	Union Institute of Academy (Randoph County)
1859	Trinity College (Methodist Church)
1892	Trinity opened in Durham (Washington Duke)
1897	Coeducation
1924	Duke University
1930	The School of Medicine and Hospital
1939	Pratt School of Engineering
1963	first black undergraduate
1972	Trinity College of Arts and Sciences
2012	Nobel Prize in Chemistry (Prof. Lefkowitz)

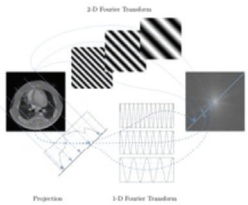
Duke University to Increase Faculty Diversity, Campus Inclusion with $16M from The Duke Endowment |

私が医用工学に興味を持ったきっかけは、１つはCTで、投影切断面定理という数学の定理が画期的に医療に役立つことに衝撃を受けました。もう１つは、神経の興奮がHodgikin-Huxleyの式という数式で表されることで、生命現象の基礎となる神経の動作が数式で正確に表現できるということに強い興味を惹かれました。

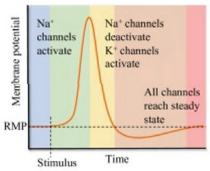
留学のきっかけは、日本の大学院生時代に、1985年に日本で開催された、The 14th International Conference on Medial and Biological Engineeringという学会に参加したことでした。ここで、来日されたDuke大学のRobert Plonsey教授とお話させて頂く機会があり、その後フルブライトプログラムに応募し、また数理科学振興財団様のご支援を頂いてDuke大学に留学させていただきました。

医用工学に興味を持ったきっかけ

- CT
  - 投影切断面定理



- Hodgkin-Huxleyの式
  - 神経の活動電位の発生
  - $\frac{dv}{dt} = -\frac{1}{C}\{G_{Na}m^3h(v - E_{Na}) + G_K n^4(v - E_K) + G_{leak}(v - E_{leak})\}$



Projection-slice theorem – Wikipedia
A schematic of an action potential. When a stimulus is applied, an... | Download Scientific Diagram (researchgate.net)

Duke大学の学生生活で最も驚いたことは、履修科目数の少なさでした。日本の大学では週に15コマ程度履修していましたが、Duke大学では、週2-3科目しか履修せず、その代わり、1つの科目が週3-4コマ分開講されます。非常に密度が濃く、理数系の場合1科目履修すると教科書1冊は読み切って演習を終えることになります。修得後は本当にその科目に対して自信がつきました。

Duke大学の学生生活

- 履修科目数
  - 週3科目
  - 勤務先大学では学生は週17コマ
  - 勤務先大学では自分自身は週9コマ
- アドバイザー Dr. Roger C. Barr
  - 定期的な研究打ち合わせ
  - 学会発表
  - 学位論文
- TA

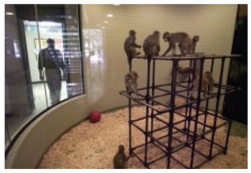
Hudson Hall - ダーラム, NC (foursquare.com)

博士論文は、Plonsey教授と共同研究をされておられたDr. Roger C. Barr先生にアドバイザーになって頂きました。非常に親身になってご指導頂き、学会発表もさせて頂き、素晴らしい先生方に学位論文の審査員になって頂きました。最初の1年間はフルブライトプログラム、数理科学振興財団様のご支援で留学生活ができました。その後はティーチングアシスタントをやらせて頂き、Duke大学で授業料と生活費を頂いて修了することができまし

た。大学院修了後、Duke大学のAres Pasipoularides教授の紹介で、Harvard Medical SchoolのNew England Regional Primate Research Centerという所でPostdoctral Fellowを務めさせて頂きました。工学系の大学院修了後に医学系の研究分野に飛び込んだので、初めは非常に苦労しましたが、Dr. Steven Vatner先生のご指導のもと、動物実験による心不全に関する多くの論文を出させて頂きました。こちらには多くの日本人のフェローの方がおられ、その時のつながりが、帰国後の仕事の大きな財産になっております。

Postdoctral Fellow

- New England Regional Primate Research Center, Harvard Medical School
- Dr. Steven Vatner
- 心不全の動物実験



HMS to Wind Down Operations at Primate Research Center | Harvard Medical School

帰国後に就職した鈴鹿医療科学大学は、1991年に創立された日本診療放射線技師会を母体とする独特の大学です。当時は、また現在でも医用工学部のある大学は限られており、自分の専門と経験を生かせる場として赴任いたしました。1993年着任当時は、2学部4学科総学生定員960名の小規模大学でしたが、現在は、4学部11学科学部2919名、大学院62名の中規模大学となり、保健衛生学部に放射線技術科学科・医療栄養学科・臨床検査学科・リハビリテーション学科・医療福祉学科・鍼灸学科・救急救命学科を、医用工学部に臨床工学科・医療健康データサイエンス学科を、薬学部薬学科、看護学部看護学科、大学院に医療科学研究科・薬学研究科を擁しております。

現在は医用工学部臨床工学科に所属しております。臨床工学は医用工学の臨床応用分野で、生命維持管理装置の操作・管理を行う国家資格である臨床工学技士を養成しております。臨床工学技士は、日本にしかないユニークな資格です。医療機器は、心電図や X 線診断装置など古くから診断用機器が使われてきました。一方、治療は長い間手術または薬剤が中心でした。1960年代から人工呼吸器、人工透析装置など機械による治療が普及し始め、現在では機械のない医療現場は考えられない時代になってきています。臨床工学技士の業務には、人工呼吸器、人工透析装置、人工心肺装置、ECMO、高気圧酸素療法装置などの生命維持管理装置の操作・管理の他、ペースメーカ関連業務、心臓カテーテル検査治療業務、内視鏡管

理業務などがあります。また工学知識を生かした医療機器の保守点検管理業務、医療機器による事故の防止業務もあります。これらの業務を全て行うことが可能であるのは日本の臨床工学技士だけで、海外では透析は、看護師の上級資格者が、機器保守点検は医療技術者などと分業がされています。工学知識を医療安全に応用できるという意味では日本の臨床工学技士の資格は優れたものであり、また透析導入後の生存率が世界でも最も高い国の１つである実績にも結びついていると言えると思います。医用工学は日進月歩であり、先進医療の一端をご紹介すると、メスを入れずに、がん部位に集中的にダメージを与える一方で、周辺正常組織へのダメージを小さく抑えるがんの重粒子線治療、生体内に光感受性物質を注入し、標的となる腫瘍組織にある波長の光を照射して光感受性物質から活性酸素を生じ、病巣を治療する光線力学療法、Covid-19で一躍有名になったECMO（体外式膜型人工肺）治療、手術支援ロボット：ダ・ビンチ、ロボットリハビリテーションシステムHALなどが挙げられます。

鈴鹿医療科学大学

- 1991年創立　　日本診療放射線技師会を母体とする独特の大学
- 1993年着任　　2学部4学科　総学生定員960名の小規模大学
  保健衛生学部　放射線技術科学科・医療栄養学科、
  医用工学部　　医用電子工学科・医用情報工学科開設
- 1998年 大学院医療科学研究科開設
- 2008年 白子キャンパス開校　薬学部開設
- 2023年 4学部11学科　総学生定員約3000名の中規模大学
  保健衛生学部　放射線技術科学科・医療栄養学科・臨床検査学科、
  リハビリテーション学科・医療福祉学科・鍼灸学科
  救急救命学科
  医用工学部　　臨床工学科・医療健康データサイエンス学科
  薬学部　薬学科
  看護学部　　看護学科
  大学院　　医療科学研究科・薬学研究科

Clinical Engineering　臨床工学

- 医用工学を臨床現場の技士として適用
- 生体機能代行装置の操作・管理
  - 生命維持機能を機械が代行
- 日本にしかないユニークな資格
  - 海外では主に看護師の上級資格と機器保守点検技術者に分かれる

臨床工学技士の業務

オリエンテーション2015

私自身の現在の研究課題は、IPMC (Ion Polymer Metal Compound)と言われる導電性高分子膜を用いた人工筋肉開発の基礎研究です。これはNafionと呼ばれる高分子の両面に金めっきを施し、両側に数ボルトの電圧を印可すると高分子膜が屈曲する性質を医療に応用するという研究です。

非常に狭い分野の教育・研究に関する話にご清聴頂き、誠に有難うございました。

3. 名古屋フルブライト・アソシエーション会員の声を紡ぐ
オーラル・ヒストリーの取り組み

第１回「今辻三郎先生」

はじめに

フルブライト・プログラムが日本で始まってから昨年で７０年を迎えた。その間、前身のガリオア・プログラムを含め、フルブライト奨学金を得て米国に留学した日本人は約 8,700 名にのぼるという。現在の日本では、パンデミックの影響を除けば、留学制度は公費・私費ともに多数あり、一般の学生にとってアメリカ留学は珍しいことではない。けれども敗戦で荒れ果てた日本からアメリカの大学に留学するなど夢のような時代、フルブライト奨学金を得ることができたのは、尋常でない競争率を勝ち抜いたごく限られた人々であった。（ガリオアのときは２０～３０倍、第一回のフルブライトでは18倍だったという。）

その後各分野での活躍を通し、第二次世界大戦後の日本を復興に導き、新たな日米関係の構築に貢献されたことで、フルブライト奨学金は高く評価され、後続の派遣生にも励みになっている。斎藤元一著『フルブライト留学一期生』（文藝春秋　1984年）には、数名の方々のライフ・ストーリーが収録されてるが、フルブライト同窓生の歴史を記録する貴重なものである。

私がフルブライト同窓生として末席を汚すようになったのは、1998~99年にフルブライト奨学金研究員プログラムを終え、椙山女学園大学に復帰してからである。フルブライト中部同窓会（現在の名古屋フルブライト・アソシエーション）の活動を通し、中部圏の諸先輩と直に交流の機会をいただけるようになった。講演会や懇親会で昔のお話をうかがうたび、生の感動をいただいた。

日系アメリカ人にオーラル・ヒストリーのインタビューをしてきた私は、日本のフルブライト同窓生の口述記録を残すことができれば、日米史の貴重な資料となるに違いないと感じた。アメリカでは様々な団体や組織が関係者のオーラル・ヒストリーを収録保存し、多くは一般に公開されている。名古屋フルブライト・アソシエーションに会員のオーラル・ヒストリー・プロジェクトを提案したかったが、差し出がましいかと躊躇しているうち、20年近い歳月が流れた。その間、講演会での留学体験談が文字に起こされニューズレターに掲載された場合があるが、数が限られるうえ、個人的な出来事や感想はあまり出てこない。フルブライト留学の前後も含め、懇親会でうかがうようなライフ・ヒストリーを初期の方々からうかがいたいと願い続けていた。

ようやく実行に移す原動力をいただいたのは、今回そのお話を掲載させていただくところの今辻三郎先生のお陰であり、感謝に堪えない。この会を通して長年存じ上げていたのだが、確か2017年秋の懇親会でご出身が鹿児島の知覧と知り、幼少期からのお話を是非うかがわせていただきたいとその場でインタビューのお願いをしたのである。その少し前に知覧を訪れ特攻平和会館等を見てきた私は、今辻先生の知覧での子供時代の体験がどのよう

にフルブライト留学につながったのか、また渡米されてどのように思われたのか、是非うかがいたかった。ありがたいことにご快諾いただき、準備などで延び延びになったものの、2018年3月にご自宅にお邪魔して半日じっくりとインタビューさせていただいた。録音された部分だけでも２時間を超える。

その後（2019年秋であろうか）名古屋フルブライト・アソシエーション総会にて、今辻先生のインタビューのことをご紹介し、当会のオーラル・ヒストリー・プロジェクトとして引き続き他の会員の方々もインタビューを行い、会員の歴史として保存・公開していくことを提案したところ、ご理解とご承認をいただいた。予期せぬことにその直後から新型コロナ感染が拡大した。対面インタビューなど全く不可能な状況になり、本会の総会・講演会もオンラインで行うようになった。100年に一度のパンデミックの訪れで、まだ現役と思っていた我々の世代も「命の危険はいつやってくるかわからない」と実感させられた。

70周年を迎えたくらいだから、同窓会会員の年齢層は高くなるばかりである。純粋にフルブライト同窓生の歴史を残し、後世に伝えるため、本会会員のオーラル・ヒストリー・プロジェクトが急務である。また、そこに出てくる第二次世界大戦中～敗戦後の日本の状況と、そこで新たな日本を模索するフルブライト同窓生の努力と貢献は、今の若い世代に重要なメッセージを届けるであろう。初期の同窓生は本当に平和で民主的な日本を意識し、それに貢献したいとの思いと行動力が備わった方々だからである。彼らの生き方・考え方を記録し共有することで、平和で自由な日本、そして国際社会を目指す若者が増えることを願う。

第1号となっていただいた今辻先生に心よりの謝意を表すとともに、本会の諸先輩方々には順次インタビューのお願いをさせていただきたく、これからのご理解とご協力をお願いする次第である。オーラル・ヒストリー・インタビューのプロセスで、また記録として形になったインタビューを通して、名古屋フルブライト・アソシエーション会員の交流が深まり、また対外的にも発信できるようになることを願っている。また一緒に活動をしているイースト・ウエスト・センター中部同友会ともこの活動を共有していけることを願う。

山本恵里子

今辻三郎先生のオーラル・ヒストリー・インタビュー

2018年３月９日　愛知県春日井市のご自宅にて収録　（聞き手：　山本恵里子）

【今辻三郎先生　略歴】

1934年4月12日に鹿児島県川辺（かわなべ）郡知覧町中郡（なかごおり）にて、８人兄弟姉妹の次男として材木商の家に生まれる。知覧国民学校5年生の夏に終戦を迎え、知覧小学校を卒業。知覧中学校卒業後は官立大島商船学校に入学し３年間学ぶ。その後大学進学の準備をし、1954年学習院大学政治学科に入学。病気休学を経て1960年に卒業し、日本道路公団に入社。主に世界銀行借款の事務を担当する。1968年7月から70年9月まで、日本道路公団からフルブライト交換留学生としてオクラホマ大学大学院に留学。大学院で政治学を専

攻すると同時に、英語教育を学び、同大学日本語講師も務めて外国語の教え方を実践的に学んだ。留学後は道路公団に復職するが、名古屋勤務の時代に実践的英語を若い世代に教えたいという熱意から、2年後に退職し春日井市にて英語塾の経営に身を投じる。フルブライト留学で身につけた英語力を生かし、県立小牧工業高校・高蔵寺高校の常勤講師をしながら、学習塾「高森台教育センター」を1993年まで経営。昨年米寿を迎え、現在も春日井市の自宅で家族とともに暮らす。テープで英語の勉強を続け、コロナ禍を元気に生き抜いている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（補足説明）2時間以上に及ぶインタビューは、聞き手の山本が文字に起こし、作成したトランスクリプトをご本人とご家族に校閲・確認をしていただいた上で、名古屋フルブライト・アソシエーション会員オーラル・ヒストリーとしての保存・公開をご了承いただいた。今回はニューズレター掲載のため、山本がトランスクリプトに基づき、凝縮・編集した。オーラル・ヒストリーの特性を生かすため、インタビューの言葉遣いはほとんどそのままである。割愛した部分は　…　で表記し、山本からの質問等は省くか鍵括弧［Y: ］で記載した。また補足の言葉も鍵括弧で挿入。読み仮名は括弧（ ）で記載した。斜体のブロックは補足説明や資料。以下要約である。

【知覧での幼少期】

名前は三郎なんですが、なんでかというと、親父が三郎という名前が好きだったと聞いてますけどね。…当時、産めよ増やせよっていう標語がありまして、男の子を軍人のリクルートのために男の子をもっとたくさん生みなさいと。…それで男の子が生まれますとね、産婆さんが「おめでとうございます。兵隊さんですよ」と。男の子のことをね。それで女の子が生まれると「おめでとう、看護婦さんですよ」ってね。当時は女は陸軍の看護婦として従軍したんですね。それくらいまあ男の子を生むように国策で。それで１０人産まれたところは国から表彰されたんです。…それでまあ私共の時代は、生まれたら軍人になるんだと。男の子はですね。お国のために、という言葉は大変ポピュラーだったんですが。それでまさしく私の一番上の姉は、陸軍病院の看護婦で満州の一番ソ連国境の包頭（ホウトウ）に勤務したんですがね。

[両親の仕事は]製材所の経営です。それで多い時は４０名位、当時職工…さんがいたんですが、大東亜戦争がはじまりましたら、次々に召集されて。当時赤紙が来るんですね。何月何日までに――鹿児島は四十五連隊だったですから――四十五連隊に入隊せよ、と。そしたらもう何はさておいて…入隊祝いをして、工員を取られた訳ですよ。どんどんですね。そして私の家の裏に、工員寮がありましたから、そこで終戦後帰ってきましてね――帰ってこなかった人もおります――帰ってきた人の中に、いかにニューギニアで餓死寸前の状態に置かれたかというような話をしましてね。工員の中に private 兵隊［二等兵］、下士官もおれば将校に近い人もいたんです。そういう、戦後は兵隊帰りの人が工員にいました。戦時中は応召してですね、帰ってきた人もいれば、帰ってこなかった人もいました。

[私が生まれたのは昭和] 9年ですからね。１２年に中国戦争が始まったんですが、それで私が記憶にあるのは、知覧飛行場が完成したのは昭和１６年の冬だったんですね。それで大急ぎで。[戦争は] １２月に始まったんですが、もう１６年の初めから飛行場作りが始まったんです。飛行場を作るのに…周りの畑や山まで全部平地にして。広い飛行場を作るために何月何日までに家を取り壊せとか、何月何日までに…木を伐採しろということで。製材所でしたから、その木を買ってですね、そして木を切り倒して、製材にした訳ですが、あまりにも急いで言われたためにね、木を切る時に切った木に足を挟まれてケガした人もいたっていうことを覚えています。

それでその飛行場を作る時に、芝生を飛行場に植えるわけですね。そのために周りの町村から労働奉仕――当時奉仕、奉仕という言葉で呼んでおりましたがね――その周辺の集落に何人人夫を出せという命令が来まして、各集落でその飛行場完成のために働きに――奉仕に行って。…手弁当という言葉がありますが、弁当を持って行って。・・・

それで１２月８日に戦争がはじまりましたから、その時にもう飛行場は出来上がってた訳です。それで１２月８日に戦争状態に入ったというときに、真珠湾攻撃がありましてね、その時に大々的に真珠湾攻撃に入った旧軍神――亡くなった潜航艇（せんこうてい）という小さな潜水艦に乗って、真珠湾の入口に張ってあった網を通り抜けて攻撃した旧軍神を大々的に讃えて、そしてその海軍の制服制帽を着た旧軍神の写真を各小学校で…買って家で飾るようにと言って。

当時鹿児島出身では横山少佐…海軍中尉だったんですが、二人一組になって潜航艇に乗って攻撃した訳ですね。下士官とその将校とですね。それでその横山少佐の写真が別にまた大きなブロマイドみたいな写真がありましてね。そしてそれを国民学校で、一家庭で一枚買うようにと奨められて、買ったことを覚えております。

そしてその「横山少佐讃えずや」という歌を作って、それを小学生みんなに歌わせたんですね。・・・ヒーローです。鹿児島からは特に海軍に、鹿児島二中という学校がありまして、その二中から海軍兵学校という海軍の学校があったんですが、そこへ入学してエリートの海軍のコースがあったんですね。…それで昭和１６年４月から、それまでの知覧小学校という名前は、知覧国民学校という名前に変わったんです…私どもは国民学校に名前が変わってから入ったんです。…私どもは小国民であると。それまでは要するに児童だった訳ですね。ところがお国のための学校であるから、小国民であるといって。それから軍国主義教育が非常にきびしくなって…　[学校には] 奉安殿――天皇陛下の写真をいれておく建物が別にあったんですね。コンクリート建ての小さな神社みたいなのがね。そしてことあるたびに、朝礼なんかがあると――宮城遥拝（きゅうじょうようはい）という言葉がありましてね――東京の方に向かって頭を下げるんです。…

それからその後、福岡に大刀洗（たちあらい）という地名がありまして…そこに陸軍の航空隊があった訳です。その太刀洗いの飛行士訓練場っていうのがあって、知覧の飛行場がその分教場になったんです。…それは飛行場ができてすぐです。その時に少年飛行兵が来て、

そして二枚ばねの赤とんぼという練習機が――飛行機じゃないですよ。上に羽があって、下に羽があって、その間に胴体があるんですね――それで、当時パイロットのことを日本語で搭乗員って呼んでたんですね。飛行機のパイロットになる人をね。…

そして［知覧飛行場が］その搭乗員の訓練所になった訳です。ところが飛行場は知覧の町よりも一段高い、百ｍくらい高い、高台にあったものですから、町の人と飛行場とは全然分かれてまして、何がどう起こっているかはそこに出入りする人しかわからなかったんですね。ただ、その少年飛行兵――当時十代だったと思うんですがね――その少年飛行兵が街に映画を見に来たり、外出の時におりてくるときに見かけるときだけだったんですが、何せ標準語を使う人たちですから、全然もうよその人を見るようなあれ［態度］で、交流というのはあまりなかったですね。…

その飛行兵［の戦闘機の操縦］を訓練するための訓練所だった訳ですよ。ほんとに若い、まだ二十歳になる前のティーンエージャーの人たちが来て。その飛行機が音を立てて飛んでいるのをみるだけだったですね、町の人たちは。すべて秘密主義で、スパイがいるから一切飛行場の話なんかはしてはいけないっていう雰囲気だったんです。ですから町の人との交流というのは、飛行場に勤める人以外は飛行場で何があったかは全然知りません。知るチャンスがなかったですね。…知りようがない訳です。それを口にすることも禁じられてたですね。それでただ、私はものおじしないタイプで、航空隊の訓練兵が町に降りてきたときに、兵隊さんと手をつないで遊んだことを覚えているんです。…［私］一人で。その言葉も通じなかったんですがね。でもどういうわけか、向こうが来い来いと言って、手をつないで歩いたことを覚えています。…

［Y:　その時は、島浜とめさん［が］食堂をやっていらして飛行兵の人が来られたらご飯を食べさせたとか？］

それは、攻撃基地になって［からそうです］。戦闘機の操縦兵を訓練するための訓練所から、飛行機に乗って沖縄戦に出撃するための基地に変わってきたんですね。最初の［昭和］１８年ごろまでは訓練所だったんです。大刀洗の分教場ということでね。パイロットの訓練所。

［Y:　特攻基地になったのは、１９４５年の３月という風にかいてありますけれども、それは本当にもう敗戦の数か月前？］

［昭和］１９年ごろからだったと思うんですがね。沖縄方面に、そこから攻撃機が［飛び立ち］・・・基地になったわけです。戦争基地に。その分教場からですね。それで記憶にあるのは、飛行機のエンジンの音はゴーゴー町まで聞こえていたんですが、いっぺん総攻撃をするときに泊まるところが足りなくて、町に――民泊ですね――その飛行機の搭乗員を［泊めたんです］。それで飛行場の宿泊施設が足りなくて、各町の人を泊めるくらいの部屋のある家に二・三人ずつ泊めて、その総攻撃の日のために、兵隊が街に泊ったことが一ぺんだけありましたね。それで私のうちにも［兵隊が］三人泊って、そしてごちそうを出して。まあ、名誉なことだったんでしょうね。私も飛行兵と一緒に布団に寝たことがあるんですが。

それから終戦後、その人たち、飛行兵は生き残っていて、茨城県でピーナッツの栽培を始めてたんです。それを姉が住所をわかっていて、［自分と］弟と一緒に尋ねて行ったことがありました。そしたらその飛行兵は、攻撃したのを見届ける役目の係りで、通信担当だったといってましたね。それで戦争が終わったら、茨城県の農家に帰ってピーナツ栽培を始めたと。私のうちに泊ったことをよく覚えていてくれましてね。歓迎してピーナツをもらって帰ったことがあります。その時は一斉に飛び立って、大きな編隊を組んで、沖縄の攻撃に向かった訳ですね。

訓練の時の分教場のときは、田口大尉というのが…知覧の町に家族と一緒に住んでいて、それで毎日車が飛行場の軍隊の車が迎えにきて、飛行場に勤めていたんですがね。その田口大尉の家には、当番兵というのが来て、家事を手伝っていたんです。風呂を沸かしたり、薪を割ったりね。で、田口大尉の子供が小学校で一緒でしたから、それでその［大尉が］転勤になって引き上げるときに、小学校の庭に集まって、その飛行機が真上を飛んで［行くのを］見送ったことがあります。

そして後に着任したのが、橋口少佐というバリバリの航空士官学校出の――その橋口少佐が隊長で来た訳ですが、その頃から、それがもう昭和１９年頃だったですね。橋口少佐も知覧の町の官舎に住んでいて、飛行場には車で送り迎えしていて、そういう、佐官－－少佐・中佐・大佐というのは佐官と呼んでいたんですがね。…佐官というのはエリートなんですね。佐官の乗っている車には黄色い旗を、車の先頭の右側のアンテナみたいなのに付けててね。佐官が乗っているということは分かるようになってた訳です。

そしてその特攻隊［攻撃］が始まった。…要するに特攻隊員というのは、特別なもう神様扱いだったですね。

［Y: それはでも町の人には知らされたんですか？］

ええ。もう特攻隊が出てるということは、飛行機の整備をする人がですね、町から勤めていたわけです。朝晩行き帰りしてたわけですからね。その人たちはもう特攻機が出ているというってことは知っていた訳ですね。それから知覧実科女学校というのがありましてね、その女学校の女子生徒が特攻隊員の世話をするために挺身隊として、働きに行っていた訳です。その人たちは内情を非常によく知っていたんですね。それで特攻機を見送る、桜の枝を振って見送るのは、写真になって残っているんですが、その時特攻隊員が街に出てきて、出撃の前に宴会を開いたり、ごちそうを食べたりするのは、今残っているとみや旅館、とみや食堂だった訳です。

それで、私は見たことがないのですが、とみや旅館の宴会場には、特攻隊員だったか飛行兵がお酒を飲んで、刀で柱にやけを起こして切り付けて、その傷跡が今も残っているというんです。いずれは死ななきゃいけないという、すさんだ気持ちでいる訳ですね。それでひそかにその特攻隊員の家族持ちの搭乗員の奥さん方がお別れにきて、とみや旅館に泊まって、そこで会って。その世話をしたのがとみや旅館のお母さんだった訳です。…［その娘の］玲子さんなんかが一番よく知っていたんですが、もう亡くなっていますからね。特攻隊員の利

用できる唯一の飲食店だったんですね。

父は鳥浜とめさんとは付き合いがありまして、私の親父は製材所をやっていましたから、顔が広かったんですね。

［Y: 当時彼女は有名人だったのですか？］

有名人です。私が覚えているのは、［ある］夜、魚を取りに知覧の町に行っていてランプを灯していたら、飛行機の特攻隊員が訪ねてきて――当時もう一つ料亭があったんです――その料亭に行きたいんだけど、道順はどうしたらいいか聞きにきましてね。「明日僕は沖縄に向けて出撃するけれど、あとのお国の守りは君たちに頼むからな」と言って、別れたことがあるんです。…

「それじゃあ明日飛行機で飛ぶときに、翼を振って合図してくれないか」と言ったら――それは当時三機が三角形の編隊を組んで飛ぶわけですね――ひとりだけ羽を振ったりするとなんかの合図と間違われるから、そういったことはできないと言われたことがあります。私は特攻隊員と直接知り合ったのは、その一人くらいだったですね。

［Y: その時どう思われました？ヒーローとしてとか、悲しいとか。］

当然のことだったですから、何の考えも思わなかったですね。お国のためにただ死んでいくんだと。神様扱いだったですからね、特攻隊員というのは。

［特攻攻撃が終わった後］その時に、飛行機は残っていたんです。それでその飛行機を、空襲が来るとね、山の中に隠していったんですよ。車で引っ張ったり、人が押したりしてね。虎の子でしたからね。その時の飛行機というのは。知覧の飛行場は陸軍だったですから、ハヤブサっていう戦闘機だったんです。一人乗りのね。そしてこのお茶を作っている［同級生の友人の］江平［貞男］君のところは、飛行場と地続きだったですから、そこで修理をしたり空襲が来た時にそこへ飛行機を運んで行って、林の中に飛行機を隠していたんです。

そして今度は８月１５日に負けたときに、まだ戦闘機がそのまま10機か20機残っていたんです。残されていたんですよね。そして兵隊はみんな解散になって、郷里へ帰って、その橋口少佐とあと将校が３・４名残って、アメリカ軍が進駐してくるのを待っている状態だったですね。そして昭和２０年の冬に、アメリカ軍が進駐してきて、そして知覧の町の旅館に宿泊して、飛行場へ行って、今度は要するに飛行基地を壊すことと、戦闘機を壊す役割だったと聞いています。私は実際には見てはいないんですが。

実際に飛行機を破壊したのはアメリカ軍だったんですよ。それが、永久旅館という旅館に泊まってね、ほんとに若いアメリカ軍の兵士だったんですがね。何か月くらいいたでしょうかね。２０名くらいいたんですがね。それでね、その鳥浜とめさんのところは、８月１５日までは日本の特攻隊の指定旅館で大いに繁盛していたんですが、今度はアメリカ軍がきたらアメリカ軍の指定の飲食店になって、まあ商売は繁盛したんですね。それで、要するに荒くれ男たちのアメリカの兵隊でね、いろいろありましたね。

それでその橋口少佐は、戦後処理のために帰るわけにはいかなくて飛行場に留まって、そして飛行機を破壊する、それからその特攻基地を壊すための、今度はアメリカの兵隊の命令

を受けてこき使われるという立場になったんですね。そのエリート少佐が。大変な屈辱だったと思いますよ。…ですから、あの人ほど天国から地獄へ落ちたような、戦争でひどい立場になった人はいないと思いますね。…それはもう総司令官ですからね。特攻兵を命令して送り出す立場の人ですからね。絶対権限を持った人だったんですよ。

［Y:　よく特攻兵で行って、飛行機が不調だったりとか、不時着したりして戻ってきたりすると、ものすごく責められたというような話が聞かれますが。］

それは極秘に、秘密にされてね、公表できないし接触――他の兵隊とも接触できなかったんです。というのは、士気を削ぐんですね。途中から帰ってきたとなると。死ぬのが怖くて帰ってきたんじゃないかと。板津さんの飛行機は徳之島に不時着したと聞いていますがね。その頃の飛行機の整備状況というのは決して良くなかった訳ですからね。そして片道の燃料だけを積んで、５０キロ爆弾を積んで飛んでますからね、一ぺん飛び立つともう降りることは、引き返すことは不可能だったわけですよ。ただもう行って、［敵艦に向かって］飛び込むだけだったんですね。「一機一艦」という言葉がありまして、一機の飛行機で敵の一隻に体当たりして撃沈させる戦法。実際には鉄板に豆腐とたたきつけるようなもので。・・・それは［米軍の］探知機で先に［日本軍の］飛行機が飛んでくるのを探知されて、敵の軍艦まで行きつくっていうことはほとんど不可能に近かったといいますね。それを実際確認するのも難しいくらい。例えば無線がついていないから、今から敵に当たります、とかいうのも伝えられなかったとか。確認のしようがなかったから…。最初はね、確認するための専門の飛行機が飛んでいたんです。見届けるためにね。

それで各航空隊から、その特攻隊員としていく人は自分から志願して、飛行機をもって知覧の飛行場に集まってきて、何機か集まると振武隊――第何振武隊という名前をつけて、そして何機か集まるとまとまって出撃したらしいんですよ。特にその特攻隊という隊を作った訳じゃないんですね。自分はお国のために死にます、と言った人が、［各地の飛行隊から］飛行機をもって知覧に集まってきたらしいんです。それが［知覧が］最終の基地だったらしいんです。それが何百人だったんですか、私は覚えていないんですが、それは知覧に記録があるんですよ。観光案内にも書いてありましたがね。全く犬死だった訳ですね。…勝った勝ったの報道だけで、［日本特攻機の］被害についてはほとんど報道されなかった訳です。わが軍の損害は軽微であったという程度でね。

【敗戦について】

［玉音放送を］私はは聞いていません。私は田舎に疎開しておりましたからね。…川辺（かわなべ）の伯父の山の中の農家で、人家が１５戸しかない山奥にもう小学校も行かずに疎開していたんです。…昭和２０年の５・６月頃からですね。それで［疎開前も］もう学校も行って警戒警報というのが鳴ると、授業は止めて学校の裏の防空壕に逃げていましたね。それで男の先生はみんな兵隊に行って、ほとんど女の先生だけだったです。…

農家だったけど供出という言葉がありまして、農家は作ったお米も野菜も麦も、供出で軍

隊のために出していましたからね、自分たちの食べる分は皆かつかつだったんですよ。…

私は小学校５年生だったですから、みんな勝つもんだと。最後には神風が吹いて、本土決戦をして。一億玉砕という標語がさかんに言われたんですよ。一億玉砕。…それで本土決戦で勝つんだと。もうぎりぎりまで勝つんだ、勝つんだというのでね。そういう軍国主義の標語で、一億火の玉だっていう表現もありましたね。…負けたとたん、みんなもう涙を流して、虚脱状態になりましたね。

［Y:　でも戦争が終わって、嬉しいという気持ちもあったのですか？］

いや、全然なかったです。残念だという気持ち。それはね、教育が勝つんだという教育で、ずーっと受けてきている訳ですから嬉しいなんて…。そりゃ大人は嬉しいと思ったかもしれませんけど。

［その後知覧の実家に戻り］学校に行ってみたんですが、疎開した人もいたりで。一学期までは軍国主義教育に非常に熱心だった先生が、二学期になって――８月１５日を過ぎて、二学期に行ってみたら、もう全然民主主義教育に変わっていて。全然反省はなかったですね。君たちはお国のために軍人になって死ねという教育をしていた先生方が、もう手の裏を返したみたいに、今日からは民主主義教育だと。平和だと。平和教育だと。日本は二度と戦争はしないんだという教育に変わっただけで、当時の師範学校の先生方っていうのは、教育の信念を持ってなくて、ただお上のいうとおりの軍国主義教育に徹してましたね。

［けれどももう教師は信じられないとは］考えなかったですね。世の中が一変してしまったものですから。あまりにも突然にね。…［教科書は］墨で塗って。軍国主義とか天皇制絶対の文章は全部墨で消して。教科書が間に合わないわけですからね、新しい教科書が。…生徒みんな集めて、教科書を出させて、何ページの何行目を消しなさい、と言って。それまでの教育が間違っていたということをね。

［その後小学校］６年を卒業したら、今度は新制中学制度になって、６・３・３制度に教育改革があったわけです。そしてみんな中学校が義務教育になって、戦時中の選抜制度の旧制中学はなくなって、みんな高校になったんですね。６年［小学校に］行って、３年中学を終えて、…その上に高校が３年ができたんですね。それが６・３・３制です。…　その頃は教室も十分でないから、もう小学校の空き教室を借りたりして、運動場も共通だったですよ。…知覧中学校です。

［中学卒業後］私は旧制の学校へ行って、普通の高校へは進まなかったんです。…［官立］商船学校にいってね。その頃の商船学校っていうのは職業学校であって、文部省の学校ではなくて運輸省の戦前からの学校で。乗り遅れたんですよ、学校改革に。それで大学に入る資格も、高校じゃないもんですからね。やっと３年生になったときに、文部省に変わって、高校卒と同じに認めると、大学進学ができるということになったんです。…

もっと勉強したいという気持ちがあって。中学からの同級生が普通高校から大学に進むようになったわけですね。私はすぐ運輸省の練習船に乗って訓練をするようなコースになっていたんです。それで私はそこで３年終わったら、その学校をやめて、そして浪人をして、

［学習院］大学に入ったんです。

【学習院大学時代】

１９５４年４月に学習院大学政治学科に進学。その動機については、インタビュー後に書面で次のような補足説明をいただいたている。「当時昭和29年頃は、戦後の社会変革時期で『天皇制打倒』の運動もあり、皇族の社会的地位も現代に比べてはるかに低く、従って学習院大学は平均的な一私立大学に過ぎず、私の知る一般の私立大の学生が講義をさぼり、麻雀や学生運動に明け暮れているのを見て、小規模の大学なら教授の指導を身近に受けられると期待しました。そして当時平和運動の先頭に立って、花花しく平和論をかざしていた清水幾太郎教授に惹かれて、選択したのです。」

その頃は加賀百万石の昔の殿様の娘とかね、前田家の。それから天皇陛下［明仁皇太子］も一年上で。それからその弟［常陸宮］も。私は病気で休学したものですから、６年かかって出たんですよ。それで…義宮（よしのみや）という今の常陸宮が一緒になりましてね。体育の時間にバスケットボールで一緒だったんですが…ボールをぶつけてけがをさせてはいかんと言って、気を遣ったものです。…それと次代の天皇陛下を目の前でみて、授業を一緒に受けたりして、普通の人間なのにどうして彼が天皇になるんだろうということで、非常にその反天皇の気持ちが強かったですね。

[特殊な席が別にあるとか]そんなことはなくて、ただ私服を着た刑事がずーっと後について見張っているわけです。それがなぜ警官とわかるかというと、腰のベルトを２つつけていて、一つは小さなピストルを下げるベルトなんです。それをみると、ああ、今日は皇太子殿下が授業に来ているな、義宮が授業に来ているなと［わかるんです］。校門で時計を持って警察官が待っているんです、到着を。それで、ああ、今日は講義をお聞きに来る日だなということがわかったんです。それで、天皇陛下のためにお前たちは死ねと言われた教育を受けてきたものですから、目の前に天皇陛下、［当時の］皇太子をみても全然尊敬するという気持ちはなかったですね。…取り巻きは、ご学友というのが取り巻いていて、普通の人とはもう全然接触がないんですよ。…その頃はまだ天皇制反対という時代だったからですね。

【日本道路公団就職とフルブライト留学】

その後は、就職しなければいけませんからね。…道路公団の本社の［経理部］資金課というところにいてね、世界銀行からお金を借りてたんですよ。［借款の事務を担当していて］それでやっぱり英語が必要になってきたんですね。…

［知覧にいた頃］戦後町にアメリカ軍がきてから、アメリカの兵隊がきてから――２・３か月いたんでしょうか――彼らがペラペラ話すのを聞いて全然わからないんですよね。世の中には英語というものがあるという刺激を受けましたね。その時。

世界銀行から調査にきましてね、外国人が。それの案内とか世話をすることがありました。

それでその接待費はたっぷりありますからね、宴会を開いて銀座のバーに案内して、国のお金を随分湯水のごとく使ったですね。[日本道路公団は当時] 高速道路を作っていたんです。世界銀行からお金を借りて。世界銀行がそのお金を使ってどれくらい道路ができているかというのを年１回調査にくるんですよ。

【フルブライト留学】

その頃、アドミッションを取れば大学院に行っていいというお金が［出る］制度だったものですから、それで２年間仕事を止めて［休職して］行っていたんです。

［その前は］６か月間全然仕事をしないで、朝から晩まで日米会話学院に行ったですからね…派遣学生として。いろんな銀行とか政府の役人とか、東京都庁の役人が派遣されてきていた人たちも、やっぱり仕事はしなくて［勉強のみ］。会話、朝から晩まで会話集中。６か月やったくらいで力はつかないですね。…

向こうの大学のアドミッションを持ってフルブライトに［出願する必要があったので、アメリカの大学に］手紙を出して、入学許可をもらって。そうでないとフルブライトを受けられなかったんですよ。…アメリカの大学の案内は冊子がありまして、その冊子の中にコースを書いてあるんですよ。それで私は政治学だったですから、政治学のコースのある大学へ application form を送ったんですけどね、いい大学に入るのは難しくてね。そして結局オクラホマ［大学に入学。］…田舎の大学は学生が足りないんですね。それで授業料さえ払う学生だったら、門戸を開けて待ってたんですよ。だから台湾の学生、イランの学生とかね、多かったですね。それに州立大学だったいから、授業料もそれほど高くないんですよ。…

［当時円の交換レートは1ドルが] ３６０円。[持ち出せる上限が] ５００ドル。限られていたんですよね。[インタビューでは目的を]聞かれましたね。まあ、日米の懸け橋になって［と答えた]。非常に寛大な国ですよね、アメリカは。よその国の留学生にね、奨学金を出すなんてね。［当時の］日本の国はよその国の学生に奨学金なんて出さないですよね。[実際にアメリカに行ってからの印象は] 非常にオープンな国で、物事が自由な考え方の国で、生活の心配はないし、天国みたいだったですね。…［渡米した時は］飛行機です。氷川丸で行ったのはほんとの最初の人たちですね。もう私どもの時代は飛行機で羽田からね。

日本を１９６８年7月２５日パン・アメリカン航空ボーイング７０７で出発。まずはテキサス大学でオリエンテーションを受け、9月１日にオクラホマに到着。知覧小・中学校の同級生、敏子さんと既に結婚されていたが、身重だった妻を日本に残して単身で渡米。

知覧で軍国主義の時代にそだち、なぜアメリカ留学を目指したかについては、書面での補足説明で「１９４５年8月１５日（＝敗戦）で、軍国主義体制から民主主義社会へ大変革が起きて、それまでの価値観が一変して、先進国アメリカの文化と民主主義の制度に無条件の憧れをいただいて、幸いにして留学の機会を得るに至った」と書かれている。

［向こうでは］まあキャンパスの中の生活だったですから、そんなに競争社会でもないし、お金を使いにいっているわけですから、町全体も留学生に対して非常に寛大だったですね。…敵意を持っている人はあんまり見かけなかったですね。私の周りでは近づいてくる人が限られてましたからね。それは兵隊に行った人なんかは、日本人を見ただけでへどを吐きたくなるような――それは自分の家族が犠牲になったりした家（うち）はそう思ったでしょうね。戦争で日本にひどい目にあわされたっていう人はあまり見かけなかったですね。勉強の方は難しくて、本が読めなくてですね。だからもう３５になってから行ったんですからね。それでMAも取らずにとにかく２年間は行ってきていいということでしたから。

オクラホマ大学大学院行政学科の授業は討論・読書・レポートが多く（１つの授業で２０００頁読んでレポートを書く）、予想以上の「苦学」から１学期目に体調を崩した。そこで「勉強の種を教室の外に求めることに転進し」、１９６９年２月からは日本語講師を務め、外国語の教え方の経験を積む。多くを学んで２年間の留学を終え、１９７０年帰国。留学中の体験は、日本道路公団の社内報『道しるべ』に「アメリカだより」や「留学報告」シリーズとして寄稿されている。今回は紙面の都合上割愛させていただくが、勉学や生活様式から公団・通行料金のテーマまで、当時のアメリカが日本人にどのように映ったかがユーモアと分析を交えて描写されている。

【帰国後のジレンマと新たな挑戦】

［日本道路公団復職後］帰ってきて２年で辞めたんですよ。…そうですね、役人生活はやっぱり嫌だったですね。いうなれば、わがままですね。…自分のやりたいこと［英語教育］を一生の仕事にしたいと思ってですね。［名古屋支社に転勤になってから］…ある日突然嫌になって。それが人生の間違いだったですね。…全然お金にならないですね。

［公務員のままでいたら］それはそれでまたマイナスがありますよね。要するに宮使いの大変さですね。…だから留学しなかったら、辞めなかっただろうと思いますがね。アメリカナイズされて…ポジションが安定していればよかったのですがね。…学習塾をここでやったんです。［けれども受験に］合格するための英語でないとお金にならないんですね。いや、好きな風にやっても、生徒が集まらなかったですね。あそこの塾にいっても成績が上がらないと。［塾を続けたのは］平成５年まで。

昭和５３年に春日井市の自宅で学習塾「高森台教育センター」を開設し、英語教育を実践。知覧出身の妻（父親は静岡から知覧茶業試験場に赴任）との間には、アメリカ留学中に生まれた長女のあと次女・長男を授かる。（息子はヘミングウェイの小説『日はまた昇る』に因み太陽と名付ける。）妻の理解を得て転進を選んだ道は、経済的苦労もあったというが、現在は自宅で妻・長女・次女とともに平穏に暮らす。

【フルブライト留学の影響・同窓生として思うこと】

自由な考え方ができるようになったということですかね。…

結局、国家利益というものが優先する世の中ですからね。それがある以上は、国家間の経済競争というものはなくならないし、国内の［国家間の］経済格差というものはなくならないですね。かといって社会主義がいいかというのも、社会主義はソビエトが失敗しているわけですからね。とりあえずは、絶対戦争をしてはいけないと。戦争をする国に加担してはいけないということですね。ところが現実はそういうわけにはいきませんでしょう。日本が独立するためには、アメリカの安保条約を結ぶのと抱き合わせだったみたいですからね。

終戦後はね、日本は戦争はしないんだと、軍備は持たないということになっていたんですがね、それがいつの間にか、自衛隊ができて、軍備、軍事施設を持つようになったわけですからね。国の税金をそういうのに投与すれば、一機５０億もするような戦闘機を買っていたんじゃ、それはお金がいくらあっても足りないと思いますね。しかし一方には北朝鮮みたいなやくざみたいな国もごく近くにありますね。中国みたいに東シナ海に出てきて、尖閣諸島は中国のものだ、竹島は韓国のものだという、そういう領土に対するインターナショナルなあれ（問題・対立）はいつまでたってもなくならないですね。北方領土だってソビエトが支配しているけれど、それを日本に返したらすぐそこにアメリカの基地ができるわけですからね。それは返すはずがないですよ。そういう国際政治の仕組みというものから逃れられないわけですよね。

でも、いつも選挙に行くと、（投票する人が有権者の）半分しかいないんですね。…与えられた民主主義ですからね。アメリカみたいに民主主義制度でやりましょうと言って成り立ったわけじゃないですからね。

…わかっているのは、絶対に戦争はよくないというのと、軍国主義がよくないということですね。天皇制はやはりやめた方がいいと。天皇陛下のためにお前たちは死ぬんだと言って殴られた教育を私どもは受けてきましたからね。［知覧特攻平和会館については］あまりにもその（特攻兵士たちの最後の）手紙の内容がよく出来過ぎているんですね。こういう風に書けと言って書かされたんじゃないかという説もあるんですね。あまりにも模範的過ぎてね。…満足して死んだはずがないんですよ。ごちそうをやっても、出撃の前の日には喉を通らなかったと言っていましたからね。…

３００万人くらい第二次世界大戦の時に亡くなっているんですね。その国家目的のために、国益のために命を投げ出すといえるほど、それほど国家というものは値打ちのあるものだろうか、とわたくしは思いますね。命には代えられないと思うんですよ。…

どこの国も名目を立てて言いますけどね。結局は国益のために、国のために命を投げ出して戦えということですからね。そういういう命令をできる権利は誰にもないと思うんですよ。…アメリカは自由にものが言える国ですからね。その点は非常にいいと思いますよ。

（完）

《あとがき》

パンデミック以来、本会の講演会や総会といった活動がすべてオンラインとなり、今辻先生とはしばらくお会いできないのですが、健康に留意されながら矍鑠と日々を過ごされ、無事米寿を迎えられたことは嬉しい限りです。コロナ感染が収まった頃には、またお話をうかがえることを願っております。知覧で第二次世界大戦を体験し、公民権運動に揺れる激動の時代にアメリカで政治学を学んだフルブライト同窓生として、今辻先生には平和への思いをこれからも発信し続けていただけるよう、心より健康長寿をお祈りしております。

（なおこのオーラル・ヒストリーの内容は、ご本人のご体験とそれに対する思いなど話されたのをなるべく忠実に言葉通り収録・記述したものです。詳細な事実確認等は行わず、また歴史の解釈等もご本人の意思を反映しております。本会の主義主張ということではなく、会員一個人としての記録として掲載させていただいたことを、記させていただきます。）

担当・山本恵里子

4. 会務報告

名古屋フルブライト・アソシエーション2022年度総会　2022年11月27日

報告

1. The Fulbrighter in Nagoya No.31の発行　名古屋フルブライト・アソシエーション／日本イーストウェストセンター中部同友会（fbandewc-nagoya.jp）
2. 会員の数69名、2020年度会費支払い人数＝24名（名古屋古ブライトアソシエーショ）
   イーストウエストセンター中部同友会22名、2020年度会費支払い人数7名、

議題

1. 2020年度（2021年4月―2022年3月）の事業報告
2. 2020年度の決算報告と監査
3. 2021年度の事業計画、予算案
4. 役員案
5. その他

1. 2021年度(2021年4月―2022年3月)の事業報告

Zoom による開催日程2021年11月12日（金曜日）
講演会：午後4：40～6：00
休憩：午後6：00：6：15
総会：午後６：15～7：00
懇親会：７：00～8：00

講演会講師の紹介
中村艶子先生、同志社大学グローバル・コミュニケーション学部教授

テーマ：ワークライフ・インテグレーション：キャリア開発の一考察

2. 2021年度の決算報告と監査

別紙１を参照

3. 2022年度の事業計画、予算案

別紙２を参照

4. 役員案

別紙　1

名古屋フルブライト・アソシエーション

2021年度決済

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
			総会案内（66人）2020年10月	21,528	
			総合案内(24人）イーストウエストセンター	11,712	
会費	75,000	3000X25			
会費	7,000	1000X 7	サーバー・ドメイン	38,610	
前年度の会費の補填など	20,000		The Fulbrighter in Nagoya no.31（5冊）	10,000	
			32X110(振り込み郵便費用）	3,520	
			振り込み手数料	110	
			講演会謝金	0	講演者の中村先生寄付
			次年度繰越金	16,520	
計	102,000			102,000	

2021年度収支決済についき、領収書、預金通帳等関係書類によって監査を行った結果、適正である事を認め、ここに報告します。

監事　　小坂敦子　　2022年11月27日

別紙　2

名古屋フルブライト・アソシエーション

2022年度　　事業計画案

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
			総会案内（66人）2022年10月	20,922	
前年度繰越金	16,520		総合案内(24 人）イーストウエストセンター	11,477	
会費	75,000	3000Ｘ25	サーバー・ドメイン	38,610	
会費	7000	1000X7	The Fulbrighter in Nagoya no.30（5冊）	10,000	
			椙山女学園	1,800	
			振替え手数料（110X32）	3,520	
			講演会謝金	5,000	
			通信費	5,000	
			次年度繰越金	2,191	
計	98,520			98,520	

名古屋フルブライト・アソシエーション会則

制定 １９８３年１０月 １日

改正 １９９３年 6月 5日、２００９年 5月３０日、**２０１２年１０月１４日**

第１章 総則

第１条　本会は、名古屋フルブライト・アソシエーションと称し、英文を Nagoya Fulbright Association と称する。

第２条　本会は事務所を名古屋に置く。

第３条　本会は、会員相互の親睦を図り、会員の経験、情報をもとに、より一層の啓発を図り、日米親善および相互理解を増進することを目的とする。

第４条　本会の会員は、正会員、準会員、賛助会員、名誉会員、シニア会員とする。

第５条　１．正会員：ガリオア・フルブライト奨学金のグランティー

２．準会員：フルブライト奨学金のグランティーで日本に滞在しているアメリカ人

３．賛助会員：本会の目的に賛同し、役員会の承認を得た者

４．名誉会員：正会員のうち、本会に特別の貢献をし、役員会の承認を得た者

５．シニア会員：正会員のうち、本人の申し出があり、役員会の承認を得た者

第２章 事業

第６条　本会は次の事業を行う。

１．会員相互の交流、親睦を深めるための活動

２．フルブライトその他の奨学金を受けて渡米するグランティーへの指導、援助

３．日本に滞在するフルブライトグランティーの研究活動 および滞在中の生活への指導援助

４．その他日米相互理解を深めるための活動および役員会で必要と認めた事業

第３章 総会

第７条　総会は毎年１回開催する。その他役員会で必要と認めた時には、臨時総会を開催することができる。

第８条　総会では、次の事項を行う。

１．事業報告、収支予算、決算の承認

２．役員の選出

３．その他の本会運営のための重要事項の議決

第９条　議決は出席正会員の過半数をもって成立する。

第４章 役員

第10条　本会には、会長1名、副会長若干名、幹事若干名、監事を置く。

第11条　任期は2年とし、役員の再選を妨げない。

第５章 会計

第12条　本会の運営資金は、会費および寄付その他の諸収入をもって、これにあてる。

第13条　正会員の年会費は 3,000円とする。

名誉会員およびシニア会員のうち申し出があった者は、年会費を免除される。

賛助会員（法人）は１口　年 10,000円とする。

賛助会員（個人）の年会費は 3,000円とする。ネットによる連絡を希望する場合には 終身会費 10,000円とする。

第 14 条 本会の会計年度は 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。

役員（2022年～2023年度）案

会長・事務局

塚田 守（椙山女学園大学国際コミュニケーション学部 教授 1981-83）

副会長

木下 徹（名古屋大学　名誉教授 1989-91）

山本恵里子（在野研究者 1998　元椙山女学園大学教授）

幹事

伊原 正（鈴鹿医療科学大学 教授 1985-1990）

加瀬豊司（四国学院大学 名誉教授 1974-76）

川島正樹（南山大学外国語学部 教授 1995-1996）

藤本 博（元南山大学教授 1977-80）

星野靖雄（筑波大学 名誉教授 1981-82, 1990-91）

Marc Bremer（南山大学経営学部 教授）

監事

小坂敦子（愛知大学法学部・国際コミュニケーション研究科 准教授 1986）

地村みゆき（愛知大学経営学部　助教　2011－2

発行年月	令和５年２月 15 日
発行	名古屋フルブライト・アソシエーション
	〒464－8666　名古屋市千種区星が丘元町 17－3
	椙山女学園大学国際コミュニケーション学部塚田研究室
	電話：052－781－5143
	Email:mamoru@sugiyama-u.ac.jp
	URL:http://fbandewc-nagoya.jp/fb/
印刷	ツゲ印刷株式会社　電話：052－621－2716